

自分たちで種から育てたアマモの苗を観察する子どもたち。植田吉将君(11)は「今まで興味がなかったけど、アマモが大阪湾をきれいにしてほしい。もう海にごみも捨てない」岸和田市の市立修善小で



自費穴をから出てエサを探すホンハゼの海胆を振り回す毛のくしゃらのヤドカリ。林長が「泉南市のサザンビーチ沖で」

「海のゆりかご」移植



アマモを移植するため海岸で準備をするダイバーたち—貝塚市の二色の浜で

「魚庭(なにわ)の海」と称された大阪湾の豊かさを取り戻そうと、かつては湾内の随所で見られた、海草のアマモを栽培、移植する取り組みが進んでいる。海岸の埋め立てで激減したアマモを復活させ、水質を浄化し生物を呼び込むことがねらい。

アマモは、水深の浅い砂地に群生し、小魚や稚魚の隠れ家や産卵場になる。そのため「海のゆりかご」と呼ばれる。沖縄で注目を集めるジュゴンのエサとしても有名で、リンや窒素など富栄養化の原因となる物質を吸収するという。

アマモの移植は、泉南市のサザンビーチなどにNPO法人環境教育技術振興会(松原市)のボランティアダイバーと大阪コミュニケーション専門学校(大阪市西区)の学生の手でおこなわれている。関係省庁や自治体などが実施中の「大阪湾再生行動計画」と連動したもの。昨年からは、日本分析化学専門学校(大阪市北区)の学生も調査に参加している。

05年には、貝塚市の二色浜海水浴場沖に大規模群落が見つかり、栽培用種子の採取や、定点調査も行っている。同法人理事長の関藤(せきとう)博史さん(43)は、二色の浜のような人工浜で自然繁殖していることは重要だという。「生息条件を解明できれば『人と自然の共生』にもつながる」

また、近隣の小中学校には環境授業に取り組んでもらい、アマモの栽培を委ねている。関藤さんは「移植だけで効果を望むことは難しい。でも、活動を知ってもらうことで周囲の人たちの関心が高まれば、大阪湾全体がきれいになるはず」と話している。

【三村政司・貝塚太一、写真も】



海底に繁茂するアマモ—貝塚市の二色の浜沖で



大阪湾に アマモを



アマモは沈没した有機物や海藻を食入る「海の掃除機」だ。(右から)岩に張り付いていた小さなホヤ。身を隠してアマモの葉を食べていた「ちまほ」の稚魚。アマモの根元にいたヒトデ。潮の動きに合わせてインキンチャクもゆらゆら